実川 恵子

王朝女流歌人の「月」

後拾遺集を中心に

月に彩られている時空を描かした作品が、王朝の文学にはたびたび表われる。

『枕草子』に二七段の角川文庫本の成信中将は、入道兵部卿の御子にて一端などに顕出する月光の場面は、その輝きの中に関旧的情を封じ込める。更に心象的な意味合いを含まれており、また、源氏物語は物語の展開や登場人物の心のありようと密接な関係を持ちながら、主人公たちの苦悩を救済するという方向へ導く働きをもっている。そして、よく引き合いに出される「更級日記」上洛の旅の記に描かれた「まっこうのいたるつるの月影ありそれに見し」乳母との別離、妹の遺児に満ちるというゆきは、おぼろる月影は、孝標の女性を雑の者としての作品を迎える時、月影によって描き出されたいの様相が和歌世界ではどのようにとらえられているのか。それを平安和歌史の一つの屈折点とされる『後拾遺集』の月歌を探ってみることにした。

後拾遺期を鏡に「月」歌はだいに増加していく傾向にある。試みに『八代集総索引』（新古典文学大系）の「月」項目に掲げられた歌数は、

古今20、後撰30、拾遺34、後拾76、金葉51と急増する。この他、

『月かげ』10、「月のかげ」5、『月のひかり』5、「月の輪」2例など、その歌詠を含め、月歌への関心の高まりを示している。

特に『後拾遺集』に急増する月光は、秋、秋末、冬、物語に随伴され時間の流れと共に心象に変化する。この点に注目して、月歌がどのような視点でとらえれば表現されるのか、考察してみたい。

後拾遺集に入る前に、先行の動撰集の月歌について少し触れようと思いたい。
『佐保山のはその紅葉散るぬべき夜さへ見よと照らす月影』

では、その月影についての話である。月影の照らす夜の光は、佐保山の紅葉が散りれている時にも、その景色を美しく照らし出す。月影を通じて、自然の美しさを体験することができる。月影は、自然の runes であり、美しさを表現するための手段である。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の美しさを体験するための手段である。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の runes であり、美しさを表現するための手段である。月影は、佐保山の紅葉が散りれている時にも、その景色を美しく照らし出す。月影を通じて、自然の美しさを体験することができる。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の美しさを表現するための手段である。月影は、佐保山の紅葉が散りれている時にも、その景色を美しく照らし出す。月影を通じて、自然の美しさを体験することができる。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の runes であり、美しさを表現するための手段である。月影は、佐保山の紅葉が散りれている時にも、その景色を美しく照らし出す。月影を通じて、自然の美しさを体験することができる。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の美しさを表現するための手段である。月影は、佐保山の紅葉が散りれている時にも、その景色を美しく照らし出す。月影を通じて、自然の美しさを体験することができる。月影は、佐保山の紅葉を美しく照らし、その美しさを引き立てている。月影は、自然の美しさを表現するための手段である。
ある。冬の夜の冷たい月を氷に見立てたこの歌の他には、
「拾遺集」、「雜曲に載る清原元輔」の
ないかくをを明かして冬の月春の花に応らざりけり
があり、他にあまり例を見ない。

だいも三位のこの歌は、冬の月の美しさを直接詠んでいるのでな
く、皑々と輝きを放つ冬の夜の月の光が見る心の中に入るこ
の月に縁でくれた一つの風景が、作者の心象と共鳴して「後拾遺
集」独特の表現世界を創り上げている。

また、作者の母性をも「源氏物語」「朝顔」巻に、「人の心を移
する花紅葉の盛よりも、冬の夜の澄まる月の光ありたる空
と、あやしけ、色なきものの身にしつつ」と冬の月を描き出
している。

続く月歌は、「驪蓬」所収の七言（36）、（52）、（57）である。少輔

の野原に踏るかところおもひかに、何あらはるる
月の出と袖の習の日を、詠に登っても感じると目を
思い知るという体験の上に成立立つ歌である。

続く「驪蓬」月歌は、中納言籌色と絵弔の贈答歌（52）である。

播磨の明秀は、今所に曇るなあにかれて、月のあかかけ
る夜、中宮の台所にたてまつり待る
おぼつかぬ空やいかならぬ月を見るも
返し、

「後拾遺集」の「雜曲」巻は、冬の月の歌を収める。「寄せ
頭から三
十九首の月歌群が配置されるが、このうち十四首、二十五パート
を月歌人詠が占めている。この点は先行例を含め見られない

「雜曲」の題らし歌（52）、

年ふれはあればみささる寒のうち心ながくもする月かな
荒れ果てた宿に生きる_estimator_の月が、作者の心をとらえ
月

があればや衰しきををやすのである。荒れた宿を照らす澄んだ月
ではない。そこに描き出されているのは、作者の心象の風景である

このような傾向の歌を寄せに掲げた撰者の意図が読みとれる。

この雛月歌群の中盤に位置するこのような作品群がある。
鞍馬よりいて待つける人の、月のいとをかしければ、

住みるる都の月のやさけにいかくらの山はこしき

返し

ちちちちちち

この贈答の作者は妹で、蓄院中務歌訛書の「鞍馬よりいて待つける人」と、歌との関係が明らかでない。歌の内容から、こ

の妹は鞍馬に住んでいたことがあり、里下かりしていた中務と蓄院の妹中将との贈答歌、あるいは、鞍馬出身の女房のことを話題に

した二人の贈答にも読める。

鞍馬の美しい月の風景を回顧している。二人の心に浮かぶのは、共

に見た過去去った時空の月の輝きであったろうか。

次ののような贈答歌もある。

来むといひつ往来きる人のもとに、月のあかりけ

ばつはしる

月

小弁

なはざるのそだたのめせであはれも待つにかならずいる月か

返し

小弁と小式部とは同じ後朱雀天皇女祐子内親王家子房であり、

小弁

このような贈答ができるような気のよい間柄であったようだ。
『蜻蛉日記』に従えば、月歌は天徳元年秋に見え、「例のつれな夜ふて、碧待の月。山の端に水に、出でむとする気色あり。さらでもありぬべき夜近かと思わ色見えむ。とままりぬべきことありば、なだいへど、さしあがねばとあり。句を「心もそろで、出でむ」として載る。まるべきかな。とし、久方の空に心の出すと、へば影はそこにもと

この条は、町路の向_Property_ の夜離れが重なり、そして女の出産と続き、冷え込んだ夫婦仲にあって作者の心はふんまんやるかたちに慣らにあふれている。また、続く月歌は、康保元年夏条に出産の心の中の光と闇をとらえている。月が前の比美を関めいた「夜の夜の月」は、月の夜の月

【後拾遺集】は、こうした女流歌人の心を輝かす純粋な月歌を積極的に評価しているように見える。それは、新しい視点で詠まれたさまざまな月歌であり、さらに郊外という新しい発揮される部分にこれら女流歌人の雑月歌を配した点にある。【後拾遺集】の女流歌人の詠歌のあったものを、後に「千載和歌集」に継承される情的、心情的な表現世界にあるとはいえないだろうか。

注

1. 高橋文之『風景と共感覚』（春風社）にこの点についての論がある。

2. 月のいる見とてよめる

3. 夜をのべて後、西山へまかりこむて、人につかは

住みねれし浴をいて西へゆく月をしたて山にこそえ

（雑誌・500 職師賢朝臣

（雑誌・1000 平実重）